

δοῦλος

ドゥーロス

知っておきたいキリスト教のことば (149)

奴隷 どれい

聖書や礼拝の中で、「奴隷」や「僕(しもべ)」といった言葉が用いられることがあります。初めてこのような言葉を聞くと時には、ドキッとするかもしれません。たとえば葬送式(お葬式)の式文の中で、司祭はこのように祈ります。

わたしたちは今、世を去った〇〇さんを主のみ手に委ねます。どうかこの僕(しもべ)を迎え、罪と死と滅びから解放し、終わりの日の栄光ある復活に導いてください。

わたしたちの多くは日常の中で「奴隷制度」を経験しておらず、奴隷や僕(しもべ)と言われてもピンと来ないのが実情です。しかし聖書の時代、奴隷は身近にいる存在でした。

例えば戦争の捕虜として奴隷になったり、自分の身を売って奴隷になることを選んだり、あるいは債務のために律法の手続きにより奴隷になったりと、様々な要因で奴隷になる人がいました。その奴隷たちは主人に対して、絶対的な服従を強いられていました。

聖書はすべての人間は、罪の奴隷であると書きます。しかし罪の束縛の中で生きているわたしたちを、神さまはイエス様の十字架の贖いによって、開放してくださるのです。

そして罪から自由にされたわたしたちに待っているのは、新たな神さまとの関係です。罪から解放されて自由になったわたしたちは、神さまの僕(しもべ)として生きていくのです。

神さまはわたしたちを奴隷としてただ服従させるのではなく、共に働く僕(しもべ)として、一緒に歩んでくださいます。

わたしたち一人一人、「主よ、お話しください。僕(しもべ)は聞いております」と答えることができるといいですね。

次回は「名」です。お楽しみに。



「ヨセフ、兄弟たちに自分を明かす」
フランツ・アントン・マウルベルチュ
(1724～1796年)

そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。

(ガラテヤの信徒への手紙 3章 28節)

